

## 12月3日 待降節第1主日

エシ 33:14～16    Iテサ 3:12～4:2    ルカ 21:25～36

### 1. ルカ

v.27 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」

初代教会が伝えた福音の終末的使信を、歴史の教会は一貫して今日に至るまで、典礼暦の最初の期節である待降節に聞いて来ました。カトリック教会の“典礼暦年と典礼暦に関する一般原則”は、そのことを確認して次のように述べています。「待降節は二重の特質を持つ。それは先ず、神の子の第一の来臨を追憶する降誕の祭典のための準備期間であり、また同時に、その追憶を通して、終末におけるキリストの第二の来臨の待望へと心を向ける期間でもある。」

初代教会が宣教した福音の終末的使信において、キリストの再臨と神の国の完成の希望は、最も中心的な確信でありました。その中では、イエスの語られた預言は黙示文学的様式で伝えられています。初代教会はそれによって、人の子の日が超自然的出来事であって、すべての人に臨み、この世のどんな歴史的出来事からも異なっていることを強調しました。

18世紀の啓蒙思想の登場以降、多くの世俗的教養人が、教会の受け継いで来た伝統的福音を真面目に信じなくなった中で、教会はその信条と典礼暦によって福音の終末的使信を守って来ました。20世紀の各種新しい神学が、「別の福音」(ガラ1:7)によって現代的キリスト教を再構築しようとする中でも、教会は使徒たちから受け継いだ福音の希望から離れることは決してありませんでした(コロ1:23 参照)。福音の終末的使信に真面目に耳を傾けることをしないで、「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です」と、使徒パウロは語っています(1コリ15:19)。

今年も、私たちキリスト者一人一人が今朝の朗読配分によって、神のことばの前での自らの信仰の決断を迫られているのです。

### 2. Iテサ

「お互いの愛」(v.12)とは、共にミサをささげている共同体の中での信仰的団結のことであり、「すべての人への愛」(v.12)とは、全世界のキリスト者との信仰による助け合いと励まし合いの実践であることは言うまでもありません。初代教会の信者たちはみな率先して兄弟愛を実践しました(Iテサ4:9-12、コロ1:4-5 参照)。それは神の国の希望に基づくものでありました。

待降節第一主日のミサで、私たちとすべてのキリスト者のために祈ることは、“まことに尊い大切な努め”でなくて何でしょう。

v.13 「そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださ

るように、アーメン。」

### 3. エレ

エルサレムの都は BC.587 年の滅亡を目前にして、バビロンの王ネブカドレツアルの軍勢の攻撃にさらされていました。イスラエルがヤーウェの声に聞き従わず、律法に従って歩むことをしなかったからです。「イスラエルの神、主はこう言われる。彼らはカルデア人と戦うが、都は死体に溢れるであろう。私が怒りと憤りをもって彼らを打ち殺し、そのあらゆる悪行のゆえに、この都から顔を背けたからだ。」(33:4-5)

急速に衰退し、残っている信者たちの信仰も世俗化して、使徒たちが伝えた福音の終末的使信が殆ど語られることも聞かれることもなくなった現代のキリスト教と、なんと似ていることでしょうか。今こそ、神の家から裁きが始まっているのです(1ペト 4:17)。

そのような荒廃のまただ中で、今朝のテキストにある主の言葉は、エレミヤに臨んだのでした。「彼は公平(ミシュパート)と正義(ツェダーカー)をもってこの国を治める。」(v.15) それは新しい時代の新しい方策と価値観によってではなくて、ヤーウェが初めから定められた公平(ミシュパート)と正義(ツェダーカー)をもって治められる世の到来の約束でありました。

神の国の確信こそが、教会がイスラエルから受け継ぎ、復活のキリストから約束された終末的希望の根底にあるものなのです。使徒たちが伝えた福音の終末的使信を聞く幸いを、今年も神がこの期節に与えてくださることを、私たちは感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

## 12月10日 待降節第2主日

バル 5:1~9 フィリ 1:4~11 ルカ 3:1~6

### 1. ルカ

主イエスの公の活動が始まるのに先立って、神の言葉が荒れ野で洗礼者ヨハネに降りました。そこで彼は、ヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。ヨハネは「差し迫った神の怒り」(v.7)と結びついたメシアの到来を告げて、イスラエルの人々にこの「来るべき方」(ルカ 7:19)を迎える準備を教えたのです。

それはイザヤ書 40:3-5 の預言の実現であったと、共観福音書は一致して理解しています。神の国に入るには悔い改めて福音を信じる必要があると、原始教会は宣教したのです(マコ 1:15、マタ 3:2、4:17 参照)。今年も待降節の朗読配分によって、全世界の教会はこの関連の旧約聖書の預言を聞いて、キリストの第二の来臨の待望へと心を向けることを呼びかけられます。

BC.587年のエルサレム陥落以降、バビロンに捕囚となっていたユダヤの民は、ペルシア王キュロスの登場によって BC.538年に故郷への帰還を許可され、ヤーウェの神殿の再建を目指すことになりました(エズ 1:2-11 参照)。イザ 40-55章は、この時代に書かれた無名の預言者の預言集で、通常第二イザヤと呼ばれます。その冒頭にあるイザ 40:3-5が、当時の状況に即しつつ、しかも時代を超えて神の救済史の終末的使信を伝える言葉としてユダヤ人の間で読まれ、さらに福音書を通して歴史の教会でも読まれて来ました。私たちは遠い昔の過ぎ去った記録ではなくて、「今おられ、かつておられ、やがて来られる」(黙 1:4)天上のキリストの言葉を、今年も待降節の朗読配分を通して聞いているのです。

### 2. バル

バルク書の今朝のテキストが、第二イザヤの預言の忠実な再現であることは明らかです。捕囚の時代のバビロンからバルクが書き送ったという形式を用いて(1:1 参照)、それよりもずっと後の時代に書かれたこの書が、救済史の終末的使信を伝える言葉としてユダヤ人の間で読まれるためのものであったことを、理解しなければなりません。歴史上のバビロンはエルサレムから見て「東の方」(v.5)でありましたが、天のエルサレムである神の国に集められる民は、「西からも東からも」(v.5)であります。

イザヤ書(35:10、40:11、49:22、51:11、60:4)およびエレミヤ書(31:8-9)に繰り返されているこの主題に一貫しているものは、神がその民を導き帰られるということで、そのために「すべての高い山、果てしなく続く丘は低くなれ、谷は埋まって平地になれ、と」(v.7)神が命じられるのです。

“悔い改める”とは、福音を信じて来るべき神の国を受け入れることです。待降節は伝統的に、この悔い改めと、キリストの第二の来臨待望の期節であります。人間の努力によって平等で平和な世界を実現することによって、この世を改造して神の国にするなどという主張は、これらの聖書の主題とは全く無縁なも

のであることを理解しましょう。

### 3. フィリ

v.4 「あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音に与っているからです。」

福音に与っているフィリピの教会の人々のことを、使徒パウロは「共に(神の国の)恵みにあずかる者」(v.7)と呼びました。「キリストの日に備えて」(v.10)その第二の来臨を待望する信仰によって一致団結している教会こそが、福音宣教者であるパウロの喜びでありました。教会の信者たちが「福音の真理にのっとって真っ直ぐに歩いていない」(ガラ2:14)ときには、彼は「涙ながらに手紙を書き」(II コリ2:4)ました。

このような使徒たちの教会と、今日に至る歴史の教会が、「一つの希望に与る」(エフェ4:4)同じ教会であることを、信条は“一・聖・公・使徒継承の教会”という定式で宣言します。しかし、すでに久しく現代の教会は、この“一つの希望”すなわち“神の国の希望”を告げる“使徒たちから受け継いだ福音”に盲目でありました。そのために、典礼暦の最初に位置する待降節が、“楽しい(メリー)クリスマス”“サンタクロースのクリスマス”の始まりとなってしまっ、キリストはたかだかメルヘンの中の“飼い葉桶の乳飲み子”のような飾り物として扱われて来ました。

そのような時代の思想と精神にあえて反抗して、教会が“典礼暦”と“主日のミサの朗読配分”によって、福音の終末的使信に人々が耳を傾けることを、特にこの期節に求め続けて来たことの意義を理解しようではありませんか。それは先ず何よりも「ミサの祭儀は、キリストの行為であり」、また福音に与っている「神の民の行為である」からです(ミサ典礼書の総則 1)。私たちは神のことばの豊かな食卓において他のどこへ行きましょう。「あなたは永遠の命の言葉をもっておられます。」(ヨハ6:68)

ハレルヤ、アーメン。

## 12月17日 待降節第3主日

ゼファ 3:14~17 フィリ 4:4~7 ルカ 3:10~18

### 1. ルカ

洗礼者ヨハネの説教は、来たり給うキリストを指し示して、悔い改めを宣べ伝えるものでした。“悔い改めを宣べ伝える”ことと“福音を告げ知らせる”ことが、同じ一つのことであることを理解しましょう(v.18、マコ 1:15 参照)。

去る15日に国会で“改正教育基本法”が成立しました。愛国心、公共の精神が強調され、家庭教育、生涯学習などに関する条文が加えられました。安倍首相は成立後の談話で“品格ある美しい国・日本を造ることが出来るよう、教育再生を推し進める”と語っています。現代人である私たちは、洗礼者ヨハネの「悔い改めにふさわしい実を結べ」(v.8)という呼びかけを、この安倍首相の言葉と相通じるもののように理解するかも知れません。今回の“改正教育基本法”の成立は、現代日本人の「では、私たちはどうすればよいのですか」(v.10)に対する一つの解答であるからです。

しかし、ミサに集まる私たち信者は今朝、洗礼者ヨハネが指し示している来たり給うキリストに目を向けることを、そしてその説教の主題である“悔い改めて福音を信じなさい”の本来の意味を知ることを、課題として与えられているのです。

### 2. ゼファ

神の国の相続人である教会を理解する上で重要な聖書の用語の一つに「残りの者」という呼び名があります(ロマ 9:27, 11:5 参照)。それは伝統的に、神の裁きを越えて、最終的に救われる主の民を指す呼び名でありました(イザ 10:20-23、ミカ 5:2 他)。預言者イザヤの息子の象徴的な名“シェアル・ヤシュブ”は、“残りの者は帰って来る”という意味でした(イザ 7:3)。そして、これらの箇所ですべて必ず語られている“帰る”という言葉は“立ち帰る”、すなわち“悔い改める”という旧約聖書独特の用語でありました。

捕囚期後のユダヤ教団が、自らをこの“残りの者”と同一視した時代に、かつて BC 7 世紀に成立していたゼファニヤ書に 3 章 14 節以下が加筆されました。2:7,9, 3:13 の“残りの者”こそは現在の我々であると理解し、彼らを救うために“来たり給う方”を指し示したのが、今朝のテキストです。

洗礼者ヨハネが宣べ伝えた“悔い改め”とは、“この来たり給う方(キリスト)に立ち帰れ”という呼びかけでありました。ですから“実を結ぶ”とは、この来たり給う方(キリスト)の御業を受け入れることなのです。教会を“残りの者”としてくださるのは神であって(イザ 1:9 参照)、人間が自らの意志と努力と功績で“残りの者”になれるわけではありません。そのことをゼファニヤ書の加筆は高らかに歌っています。

v.14 「娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び踊れ。」

洗礼者ヨハネの説教は、まさにこの意味で“喜びの福音”なのです。当時の群衆にとってそうであったように、待降節第三主日のミサで朗読を聞く私たち現代のキリスト者にとっても同じです。

### 3. フィリ

v.5 「主はすぐ近くにおられます。」

ゼファ3:17の「お前の主なる神はお前のただ中におられ……」と同様に、これは間違いなく、キリストの終末的来臨の切迫を指して語られている言葉です。預言者の説教はその到来を先取りして語る福音でありました。

キリストの福音は、キリストの救いの御業の福音であって、人間が自らの意志と努力と功績で“品格ある美しい国・日本を造る”というようなものとは違います。

「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります」(3:9)、「わたしたちの本国は天にあります。……キリストは……わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」(3:20-21)という福音によって、私たちは今年もこの待降節に「喜びなさい」(v.4)と呼びかけられていることを、感謝しましょう。

ハレルヤ、アーメン。

## 12月24日 待降節第4主日

ミカ 5:1～4a ヘブ 10:5～10 ルカ 1:39～45

### 1. ルカ

vv.44-45 「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

マリアがエリサベトを訪ねました。それは母マリアの胎内におられるイエスの来訪でありました。救い主は、すでに確かに、そこに来ておられました。そのことをマリアは信じ、エリサベトとその胎内の子は喜びました。

この期節に、私たちは古い昔のおとぎ話を聞いているのではありません。教会すなわち“体の頭であるキリスト”(教会憲章 7)のかつての来臨を追憶しているのです。神の子の第一の来臨は過去のことではありますが、私たちにとって教会は現在の事実です。ですから、“キリストにおける秘跡”(教会憲章 1)である現代の教会が、マリアと共に、エリサベトと共に、御自身の血によって教会を神の民としてくださったキリスト(使 20:28)の第一の来臨を喜ぶのです。たしかに「主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた」(1:68-69)のですから。

私たちの教会は、キリストの血によって贖われ、罪を赦された共同体であって、「あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます」(エフェ 4:15)。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じる教会は、なんと幸いでしょう。それは、神の力によって、世界において可見的に成長する(教会憲章 3)のであり、十字架の上に眠るキリストの脇腹から(典礼憲章 5)、脇腹から流れ出た血と水によって(教会憲章 3)生まれたのです。

教会は、キリストの第二の来臨を待望しています。キリストは「聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるために」(エフェ 5:27)来られます。教会は神の国の完成を渴望し、栄光のうちに自分の王と結ばれることを全力をもって望み求めているのです(教会憲章 5)。

### 2. ヘブ

v.10 「この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」

キリストはその第一の来臨によって肉となって来られた(ヨハ 1:14)とき、御自身をきずのないいけにえとして献げて、新約の教会を贖ってくださいました。「こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者なのです」(ヘブ 9:15)。私たちのミサで、十字架のいけにえが祭壇の上で行われるたびごとに、この贖いは新たな現実となり、同時に、聖体のパンの秘跡によって、キリストにおいて一つの体を構成する信者の一致が表され、実現します。実に、キリストは諸民族の光であって、すべての人はキリストとのこの一致へ招かれている

のです(教会憲章3)。

ここで確認しておかなければならないことは、教会がすべての民族にもたらすよう委ねられた“世の光”とは、“キリストの光”であって、“教会自身の光”ではないということです。マリアの胎内にキリストが宿っておられたから、マリアのエリサベト訪問は“喜びの福音”の来訪でありました。「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」(エフェ1:23)。

キリストは、間もなく誕生する方としてマリアの胎内におられました。そのように、「二度目には、罪を負うためではなくて、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです」(ヘブ9:28)。私たちキリスト者は、この「公に言い表した希望」(10:23)を、主の降誕直前の主日に再確認するようにと招かれています。

### 3. ミカ

v.1 「お前の中から、私のためにイスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。」

聖書の中で預言者を通して約束されていたように、救い主はダビデの子孫から生まれて人となりました。ベツレヘムはダビデ王の出生の地であり、永遠にイスラエルを治める者がその子孫から出ると、古くから約束されていました(サム下7:12,16)。そのようなわけで、「ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った」(ルカ2:4)と書かれています。

しかし、「聖なる霊によれば」と使徒は証言しています。「死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです」(ロマ1:4)と。「死んだ方、否むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが」(ロマ8:34)、“残りの者”である教会を救って神の国を受け継がせてくださるという希望こそが、全世界の光であることを、今年もこの期節にみんな感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。



## 12月25日 主の降誕/日中のミサ

イザ 52:7~10 ヘブ 1:1~6 ヨハ 1:1~18

### 1. ヘブ

v.2 「神は、…… この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました。」

v.3 「御子は、…… 人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」

クリスマスは、キリストの祭りです。これは元来キリスト教の典礼暦の中の祭りであって、主の降誕の“前夜の祈り”に始まり、主の公現の祝いを経て、主の洗礼の祝日まで続きます。それは、神がこの終わりの時代に、御子によって“秘められた計画”を語られたこと(1コリ2:1、ロマ16:25)と、その御子が人々の罪を清められた後、今は天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになっておられ、再臨の日を待ち続けておられるという(ヘブ10:12-13)福音の使信を聞く祭りであります。

すでに久しく、世俗のクリスマスはこの福音の使信を聞くことも知ることもなく、ただの“お祭り”となってしまうました。祭りの主人公はサンタクロースであり、その舞台にはクリスマスツリーが欠かせなくなって、世界中で同じ装飾と演出が用いられます。しかし近年、イスラム過激派によるテロの脅威にさらされている英米など各国で、公共の場でクリスマスの飾り付けを控えたり、ツリーの設置を避けたり、小売店の店員が買い物客への挨拶言葉を“メリークリスマス”から“ハッピー・ホリデイズ”に変更したりということが起きているとのことです。これに対して、米国のキリスト教保守派が“クリスマスにキリストでなぜ悪い”と反発しているというニュースも流れています。

しかし、私たちは久しく教会が福音の使信を聞くことなく、それ故にまた私たちが互いに福音の使信を語ることもしなかったことを、重大な関心事とすべきです。クリスマスが、飼い葉桶のイエスのメルヘンチックな“お祭り”であったことを、そしてこの祭りの始めから終わりまでイエスは乳飲み子のままで、復活して神の右の座に着いておられる現在のキリストについての福音の使信とは無縁であったことを、現代のキリスト者は真剣に考えるべきなのです。

### 2. ヨハ

v.14 「言は肉となって、私たちの間に宿られた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

私たちはみな、自らの罪と不信仰によって、キリストの福音の光を見ることが出来ないで歩んで来たのではなかったでしょうか。多くのカトリック信者は、その責任は教会の教導職にあると弁解するかも知れません。しかし、聖書は明確に「私たちはその栄光を見た」と証言しています。毎日多くの書籍や雑誌に親しんでいる日本人でありながら、あなたは聖書だけは読んだことがないのですか。今日すべての信者は、この使徒たちの証言と隣り合わせで生きているのです。

その聖書は、一方ではこう語っています。「わたしたち(使徒たち)の福音に覆いが掛かっているとすれば、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。」(IIコリ4:3) しかし他方で、その同じ使徒が次のように証言しています。「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、私たち(すべてのキリスト者)の心の内に輝いて、イエス・キリストのみ顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」(IIコリ4:6)

「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。」(イザ2:5) 旧約聖書はイスラエルの共同体(神の民)のことを“ヤコブの家”と呼びました。教会こそは、新しいイスラエル、神の民なのです。クリスマスは私たちが“キリストの光の中を歩もう”と呼びかけられている典礼暦の祭りであることを、知りましょう。

### 3. イザ

キリストはその第一の来臨によって、御自身をきずのないいけにえとして献げ、永遠の贖いを成し遂げられました。この方は第二の来臨によって、私たちに約束の神の国を受け継がせてくださいます。この確かな救いを、良い知らせを、喜びをもって聞くのが“主の降誕の祭り”です。

v.9 「歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃墟よ。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。」

私たち信者一人一人が、自ら聖書を通してこの“良い知らせ”を聞くこと、そしてさらに、自ら“良い知らせを伝える者”となることを、天上のキリストは期待しておられます。

ハレルヤ、アーメン。

## 12月31日 聖家族

サム上 1:20～28 | ヨハ 3:1-2,21-24 ルカ 2:41～52

### 1. ルカ

v.49 「イエスは言われた。“どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。”」

福音書の著者ルカが意図したのは、イエスがその生涯の初めから父なる神と特別な関係にあったということと、そのような受肉した神の子である方が両親と共に少年時代を過ごされたということでした。

母マリアは、ヨセフの妻としてこの子を産んだのであり、夫ヨセフは決して“重要でない存在”として物語りに添えられているだけだと考えてはなりません。まして、イエスはマリアの子であって、ヨセフの子ではないなどという主張に安易に同意してはなりません。ヨセフが父親であったからこそ、「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ」たのであって(ロマ 1:3)、そのころ「ユダヤのベツレヘムというダビデの町」に滞在していたのでした(ルカ 1:4)。

私たちは、ヨセフにとって彼の結婚生活がどのようなものであったか、何も知りません。12歳になった息子イエスを伴って過越祭に妻と共にエルサレムへ上った、ごく普通の父親として描かれているだけです。でも、フランスのクリスマスの歌ノエルの一曲の題名“ヨセフはよい妻をめとった”は、なかなか良いエスプリ(機知)ではありませんか。

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」(v.52)も、洗礼者ヨハネについての報告(ルカ 1:80)や、少年サムエルについての報告(サム上 2:26)と同じ様式の記述であって、救済史の主なる神の御業に私たちが目を向けるようにとの意図によるものです。ヨセフはマリアと共に、神の救済史の中の登場人物として生きた人でありました。

### 2. サム上

v.23 「夫エルカナは妻に言った。“あなたがよいと思うようにしなさい。この子が乳離れするまで待つがよい。主がそのことを成就してくださるように。”」

残念なことに、ミサの朗読聖書では、この節が省略されてしまっています。しかし、ハンナは夫エルカナの妻として主に願い、サムエルが乳離れしたとき、夫エルカナと共にその子を祭司エリに預けて主に委ねました(v.28)。エルカナは、毎年小さな上着を縫ってシロの聖所にいるサムエルに届けるハンナと行動を共にする、彼女の夫でありました(2:19)。私たちはここでも、エルカナにとって彼の結婚生活がどのようなものであったか、何も知りません。しかし、夫エルカナは妻ハンナと共に、神の救済史の中の登場人物として生きた人でありました。

現代人は、結婚生活というものについて、以前ほど楽観的ではなくなったように見えます。通常、人は自

分の結婚生活しか知らないために、無事にそれを維持し続けて来ることの出来た人にとっては、それが当然のことであるかのように見えます。そして、離婚したり再婚したりする人々は忍耐力のない、わがままで愛の不足した生き方をしているように考えます。人は、自分が体験したこと以外は理解出来ないのです。しかし事實は、結婚というものの困難さを実際に体験したり、その困難の兆しを感知したりする人々の割合が、急速に高くなったために、もはや楽観的には考えられないという傾向が世界的に広まっています。現代人は、好むと好まざるとに拘わらず、そのような現実に直面しているのです。

エルカナの時代、ヨセフの時代と較べて、現代人は変質あるいは退化したのでしょうか。私たち現代人にとって聖書の中の登場人物たちは、異質な世界の人たちになってしまったのでしょうか。いいえ、そんなことは決してありません。

### 3.1ヨハ

v.23 「その掟とは、神の子イエス・キリストの名を信じ、この方が私たちに命じられたように、互いに愛し合うことです。」

著者ヨハネにとって、“愛し合う”とは新しい掟ではなくて、初めから受けていた古い掟でした(2:7)。そして、教会という共同体の現実がどんなに困難を抱えているとしても、それでもまた新たに“愛し合いなさい”という掟を書き送りました(2:8)。その熱意の根拠は、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(4:10)という、救済史の中の出来事への信頼でありました。ですから、この掟は現代人とその教会にとっても、再び、繰り返し聞くべき、新しい掟なのです。

「自分の心ところに罪人を抱いている教会は、聖であると同時に常に清められるべきものであり、悔い改めと刷新との努力を絶えず続けるのである。」(教会憲章 8)

だから、私たちは感謝しましょう。「たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。」(2:1-2)                      ハレルヤ、アーメン。